特集 自ら学ぶ力を育てる

いま英語教育に求められているもの

高橋貞雄（玉川大学）

英語教育を一歩先に進める

NEW CROWN（以下，本文中 *NC*）の教育理念をご理解くださり，活用していただいている多くの先生方に心から感謝申し上げます。そして現在 *NC* で学んでいる多くの子どもたち，またかつて *NC* とともに英語の学びを体験してこられた方々にも感謝を申し上げます，

さて，英語教育の歴史を少し振り返ってみるときに，ほぼ四半世紀近く前の平成元年（1989）はとても重要な年でした。学習指導要領に初めて「コミュニケーション」の文言が盛り込まれたからです。この間ずっと日本の英語教育はコミュニケーション能力の育成に腐心奮闘してきたと言えます。一方で，世界や日本を取り巻く環境は大きく変容し，今や国際化という言葉さえむなしく聞こえるほどです。英語力の育成に対する要請は高まる反面，英語教育の成果では韓国をはじめとする多くのアジア諸国にも水をあけられている現状です。新学習指導要領が施行されるいま，日本の英語教育を一歩前進させるときがいよいよ到来したと言えるでしょう。

NEW CROWN が大切にしてきたこと

NC がもっとも重視してきたことは，「人間教育」に資するということです。公教育の中で全員の生徒が英語教育を受ける以上，英語教育を通して 1 人ひとりの生徒の人間的成長に貢献する義務があります。そのために，*NC* では英語に乗せる素材，つまり「題材」を重視してきました。キング牧師を代表とする人権の問題，広島を素材にした平和教育，その他，ことばと民族，環境保全の問題などは，共生の心を育てたり，思考力や判断力を育成したりするうえで欠かせないことです。英語教育には文化教育も必然的に伴います。*NC* は異文化理解教育につながる題材も大切に扱ってきました。世界にはさまざまな文化や伝統や価値観があること，そうしたことを学び理解しながら，それぞれがお互いを尊重していくことが重要だと思っています。端的に言えば，英語教育の目的の 1 つは子どもたちの世界観を広げることです。異文化理解の題材として，英米だけでなくアフリカやアジアを初めて扱ったのも *NC* です。この精神は，今後も継承して行くべきでしょう。

もう 1 つ，英語教育で欠かすことのできない視点が「ことばの教育」です。英語教育は英語を教える教育ですが，英語を通してことばに対する感性を育てたり，ことばについて考えさせたりする教育でもあります。ことばは，ものごとについて考えたり，考えを伝えたりする上で根幹となるものです。人間は多くの場合，ことばを通して他とかかわります。ことばには社会性もあります。ことばには，母語や第二言語や，外国語などのいくつかの層があります。*NC* はこれまでにケニアやインドのことばについて考える機会を提供してきました。ことばの教育は，アイデンティティを育成する教育です。日本人が身につけるべき英語は，母語話者の英語ではなく，国際語（国際通用語）としての英語である，と考えてきました。*NC* には，英語の母語話者，第二言語話者，外国語話者，が登場しています。彼らの言語環境は，まさに現在の国際社会で英語が使用されている現実なのです。

NEW CROWN をとりまく現状

学習指導要領が改訂されるたびにもっとも注目さ

れるのが外国語科の「目標」の部分です。現行の学習指導要領では「聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎」となっていた部分が，新学習指導要領では「聞くこと，話すこと，読むこと，書くことなどのコミュニケーション能力の基礎」となっています。実は *NC* は，以前から中学校段階では 4 技能をバランスよく指導することを重視してきました。そうしたことを考えると，今回の改訂内容は当然のことだと思われます。特に，ネットによる言語環境が充実してきたいま，読むことや書くことによるコミュニケーションは従来にもまして必要になってきたと考えられます。一方で，英語教育に携わるものの 1 人として，いままで 4 技能を本当に指導してきたのだろうか，と反省せざるをえません。たとえば，読むことについて，どのようにすれば読むことができるようになるか，ということを教えてきただろうか。訳読も音読も，授業でよく行われる活動ですが，どちらも英語力の一面をつけるという点では意味があるものの，本来の読む（読み取る）という活動ではないでしょう。4 技能の基礎の育成を学習指導要領が求めている以上，特に「読むこと」の指導では一歩先に進める必要があるでしょう。

新学習指導要領を理解する上で重要なことの 1 つに「基礎的・基本的な知識及び技能の習得と活用」があります。これは英語に限らずすべての科目に共通した要請です。当然，英語でもこの点に配慮しなければなりません。英語で言えば，文法（文構造）や単語などを確実に身につけ，かつそれを活用する力をつけるということを意味しています。そうするためのキーになる概念が「繰り返しの指導」と出口（つまり到達目標）の設定です。文法や語彙は繰り返して学び，4 技能については総合あるいは統合を含めて CAN-DO の形で目標を定めて指導を行うことが求められていると言えます。

もう 1 つ現状認識で重要なことは，子どもたちの学習力の低下です。つまり，学ぶ力の弱い子どもがたくさんいるということです。そのために，学習指導要領でも学習習慣をつけることを求めています。これからの英語教育は，今まで以上に学ぶ側に立って学ぶ力をつける，すなわち学び方をきめ細かく指導することが重要になると言えるでしょう。

英語教科書に求められること

平成 20 年 12 月に出された教科用図書検定調査審議会では「内容豊かで読み応えのある，質・量ともに格段に充実した教科書」を求めています。英語の授業は週 4 時間，各学年ともに年間 140 時間の学習を求めていますし，単語に関しては現行の 900 語程度までから 1200 語程度にまで増えています。このことを考えると，英語力の育成に大きな期待が寄せられていることが見て取れます。とはいえ，国際基準に照らして見ればそれほど驚くようなことではないかもしれません。

むしろ今後は，教科書に盛り込まれていることをすべて教えるのではなく，教えるべきこと，教えたいことが教科書にすべて盛り込まれている，と考えていくべきでしょう。そうすれば多忙な先生方も，経験の少ない先生方も，安心して教科書を活用することができるでしょう。一方，学ぶ側の生徒にとってみれば，単語も文法も自学自習をしたり繰り返しをしたりしながら学んでいけるような配慮が教科書でなされていることが重要になるでしょう。

24NC の 3 本の柱

24NC は，*NC* の伝統を継承しつつ，時代の要請に応えて一歩前に踏み出すことにしました。そして新たに以下のような 3 つの教育目標を設定して教科書を作成しました。

① 自ら学ぶ力を育てる
② ことばを使う力を育てる
③ 他とかかわる力を育てる

新学習指導要領では，思考力，判断力，表現力の育成を求めています。そのための根本が言語力です。英語を使う力はますます求められるでしょう。そして他とかかわるコミュニケーション能力の育成は現代の喫緊の課題です。私たちは，上記で約束した 3 つの力が新しい *NC* で学ぶ子どもたちに身につくことを確信し，引き続きご理解，ご支援を賜りますようお願いいたします。